

異もい喰人喰な喰悪善救
すでそうるる来からか界世

洋泮

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

誰かから必要にされているならどんな悪党であれ助ける。だが誰にも必要とされず、寧ろ嫌われている奴は…喰う。

人並み外れた身体能力を持ち、人外の部位を体から出し、不可思議な異能を使い、今日も今日とて善を救い悪を喰べる者、流丸忌彌禍。

そんな彼の元に一通の封書が送られてくる。

そこから彼は、古い先短い己の体を使い、戦っていく。

目次

I. 人喰いが箱庭に来るそうですよ？

1

II. 人喰いは箱庭の世界を知るそうです

よ？

—————

7

III. 人喰いは爆弾を投下するようです

？

—————

19

I. 人喰いが箱庭に来るそうですよ？

某月某日の正午過ぎ、ある公園に一人の男がベンチに横たわっていた。

ポンチヨというあまり見慣れない服の下にTシャツとズボンを履いた男は、まだ義務教育が終わったばかりかと思う程度の幼さが見え隠れしているもの、整った見た目をしている。だがボサボサの長い髪、目立った汚れはないが使い込んでいるのだろう、やつれた服がそれを台無しにしていた。

「疲れた……お腹もそろそろすいた……。どうしようかなあ」

男はダルそうな雰囲気を感じながらもせず、独り言を呟きながら身を起こす。髪には少々跡がついていた。男はそれを直しながら足を伸ばす。

「でも最近、〃丁度いいやつ〃がいらないんだよなあ。……嫌だけど、あいつらを頼ってみるか……。つと、なんだあれ」

お腹をさすり、困った表情を作る男は空から降ってくる封書を目にした。そのまま見続けると封書は、一寸の狂いなく男の膝に落ちていく。

「誰かの落し物……てか飛ばし物？ ……届けなきやダメだよなあ。裏になんか書いてないか……？」

訝しげに手に取ると、男は封書をひっくり返した。そしてそこに書かれた自分の名前を見つめる。男の眉間にはシワがより、ハタから見ても不機嫌なのが読み取れた。

「……んー。我輩、まだあの世から手紙が来る程寿命が来てる訳じゃ……あつたや」

見た目にそぐわない一人称を呟くとともに、名前が書かれている所を指でなぞる。その顔は何故か達観しているように見え、更にこの時を待ち望んでいたかのようにも見えた。

「まあ、あの世から手紙が来るなんて思つてはないんだけど、これは絶対に厄介事だろうね。……もう捨ててもいい命だ。ここからどう転ぶかは、どうでもいい事だよねえ」

クツクツと笑い、男は封書の封を切る。中にはこう、書いてあつた。

『悩み多し異彩を持つ少年少女に告げる。その才能を試すことを望むのならば、己の家族を、友人を、財産を、世界の全てを捨て、我らの“箱庭”に来られたし』

瞬間、男は空に放り出された。他にもどうやら同じような経緯を経た者がいるのを横目で見た後、落下に伴う圧力を受け流しながら、眼前に広がる風景に目を見開く。

視線の先に広がる地平線は、世界の果てを彷彿とさせる断崖絶壁。眼下に見えるのは、縮尺を見間違ふほどの巨大な天幕に覆われた未知の都市。彼らの前に広がる世界は——完全無欠に異世界だつた。

それを誰に言われる間もなく理解した男、るまるい流丸忌彌禍は口みかに弧を描いた。

上空4000mから落下した四人と一匹は、落下地点に用意してあった緩衝材のような薄い水膜を幾重も通って湖に投げ出される。

「むぐつ」

着水した彌禍は他の三人が無傷であることを確認し、唯一無事でない三毛猫を救出し陸地に持つていく。

「大丈夫かー」

『あ、あんちゃんあんがど……』

「おーし大丈夫そうだね」

水を吐き出す猫の背を撫でながら彌禍も陸に上がる。するとこちらに、というか猫に駆け寄ってくる女の子が見えた。

「三毛猫……!」

『お嬢ー! もうお嬢とは会えないかと思っただー!』

女の子は飛びついてきた猫を抱き抱える。その目には僅かな涙があった。

「うん、良かった……。あなた、三毛猫を助けてくれてありがとう」

「どういたしまして。命は大事にするものだからね」

お礼を言う女の子に笑顔で返す彌禍。それを見た女の子は微かに笑う。しかしす

ぐに無表情に戻り、服を絞り眩く。

「それにしても此処……どこだろう？」

「さあ。まあ、世界の果てつぼいものが見えたり、どこぞの大亀の背中じゃねえか？」
 女の子の眩きに応えたのは先に陸地が上がっていた男の子であった。先程までもう一人の女の子と会話（という名の口論）をしていた筈なのに、こちらの声に即答できるとは中々耳聡いのだろう。彌禍はポンチョを絞りながら物陰に目をやる。

「まず間違いないだろうけど、一応確認しとくぞ。もしかしてお前達にも変な手紙が？」
 「そうだけど、まずは『オマエ』って呼び方を訂正して。——私は久遠飛鳥よ。以後は気を付けて。それで、そこに猫を抱きかかえている貴女と、その猫を助けた紳士な貴方は？」

「……春日部耀。以下同文」

「我輩は流丸忌彌禍。別にお前呼びでも気にしないよ」

「そう。よろしく春日部さんに彌禍君。最後に、野蛮で凶暴そうな貴方は？」

「高圧的な自己紹介をありがとうよ。見たまんま野蛮で凶暴な逆廻十六夜です。粗野で凶悪で快樂主義者と三拍子そろった駄目人間なので、用法と用量を守った上で適切な態度で接してくれお嬢様」

「そう、取扱説明書をくれたら考えてあげるわ、十六夜君」

全員がそれぞれ自己紹介を済ませます。と、飛鳥と十六夜の間で彌禍が入り込む。その手は頭を支えていた。

「あー、つかぬ事を訊くが不良くん。君はバトルジャンキーかな？」

「ん？ その『不良くん』が俺の事なら、その質問には『ハイ』でお答えするぜ？」

「やっぱりか……。お嬢ちゃん、こういう奴に取扱説明書は存在しないと思つて」

「あら、彌禍君はこの手の人間が知り合っているのかしら？」

「知り合いというか、仲間にな……。強敵だつたりラスボスだつたりする奴に喜んで喧嘩を売るような奴がな、いるんだよ……」

「ほほう？ 俺と似たような奴がいるとはな。是非とも手合わせ願いたいもんだ」

「やめろ地形が変わる絶対変わる」

「……はあ、変な殿方達ね」

心からケラケラと笑う逆廻十六夜。

傲慢そうに顔を背ける久遠飛鳥。

我関せず無関心を装う春日部耀。

気怠るそうに腕を組む流丸忌彌禍。

そんな彼らを物陰から見ている人、黒ウサギは思う。

（うわあ……。なんか問題児ばかりみたいですねえ……）

召喚しておいてアレだが：彼らが協力する姿は、客観的に想像きそうにない。流丸忌彌禍と名乗った少年は少し協調性はあるそうだが、黒ウサギは陰鬱そうに重くため息を吐くのだった。

II. 人喰いは箱庭の世界を知るそうですよ？

十六夜は苛立たしげに言う。

「で、呼び出されたはいいけどなんで誰もいねえんだよ。この状況だと、招待状に書かれていた箱庭とかいうものの説明をする人間が現れるもんじゃねえのか？」

「そうね。なんの説明もないままでは動きようがないもの」

「……。この状況に対して落ち着き過ぎているのもどうかと思うけど」

「いやいや、あんな摩訶不思議で胡散臭い手紙を開けている時点で、この状況に慌てる程の繊細な精神を持ち合わせているのはありえないと思うよ？」

「……パニックになつてくれればいいとは思いましたが、確かにそれではまず手紙を開けてくださいませんかでしたねえ……」

黒ウサギは困っていた。できればもつと早く飛び出していったかったのだが、場が落ちて着き過ぎているので出るタイミングを計り損ねていたのだ。

しかし彌禍の言う通り、実際にパニックを起こしているのならば第一にここには来ていないだろう。

黒ウサギはジレンマに陥っていた。

(まあ、悩んでいても仕方がないデス。これ以上不満が噴出する前にお腹を括りますか)
四者四様の罵詈雑言を浴びせている様を見ると怖気づきそうになるが、ここは我慢である。

ふと十六夜がため息交じりに呟く。

「――仕方がねえな。こうなつたら、そこに隠れている奴にでも話を聞くか?」

物陰に隠れていた黒ウサギは心臓を掴まれたように飛び跳ねた。

四人の視線が黒ウサギに集まる。

「なんだ、貴方も気づいていたの?」

「当然。かくれんぼじゃ負けなしだぜ? そっちの猫を抱いてるやつも、腕を組んでる

奴も気づいていたんだろ?」

「風上に立たれたら嫌でもわかる」

「気配隠してないんだし、見つけてください」
「?」
「?」

「……へえ? 面白いなお前ら」

軽薄そうに笑う十六夜の目は笑っていない。四人は理不尽な招集を受けた腹いせに殺気の籠った冷ややかな視線を黒ウサギに向ける。黒ウサギはやや怯んだ。

「や、やだなあ御四人様。そんな狼みたいに怖い顔で見られると黒ウサギは死んじやい

ますよ？ ええ、ええ、古来より孤独と狼はウサギの天敵でございます。そんな黒ウサギの脆弱な心臓に免じてここは一つ穩便に御話を聞いていただけたら嬉しいでございますヨ？」

「断る」

「却下」

「お断りします」

「イヤだ」

「あつは、取りつくシマもないですな。」

バンザイー、と降参のポーズをとる黒ウサギ。

しかしその眼は冷静に四人を値踏みしていた。

（肝つ玉は及第点。この状況でNOと言える勝ち気は買いです。まあ、扱いくいのは難点ですけども）

黒ウサギはおどけつつも、四人にどう接するべきか冷静に考えを張り巡らせている。と、春日部耀が不思議そうに黒ウサギの隣に立ち、黒いウサ耳を根っこから鷺掴み、

「えい」

「フギヤ！」

力いっぱい引つ張った。

「ちよ、ちよつとお待ちを！ 触るまでなら黙って受け入れますが、まさか初対面で遠慮無用に黒ウサギの素敵耳を引き抜きに掛かるとは、どういう了見ですか!?？」

「好奇心の為せる技」

「自由にも程があります！」

「へえ？ このウサ耳って本物なのか？」

今度は十六夜が右から掴んで引つ張る。

「……。じゃあ私も」

「我輩もやろうかなあ」

「ちよ、ちよちよ待——！」

今度は飛鳥が左から、そして彌禍が真正面で順番を待つ。左右に力いっぱい引つ張られながら、まだマシと思っていた人の弧を描いた口を見た黒ウサギは、言葉にならない悲鳴をあげ、その絶叫は近隣に木霊した。

「——あ、あり得ない。あり得ないのですよ。まさか話を聞いてもらうために小一時間も消費してしまうとは。学級崩壊とはきつとこのような状況を言うに違いのないデス」
「いいからさっさと進めろ」

「早くしないとまた耳を引つ張るよ？」

「わかりました、わかりましたからやめてください！」

半ば本気の涙を瞳に浮かばせながらも、黒ウサギは話を聞いてもらえる状況を作ることとに成功した。四人は黒ウサギの前の岸辺に座り込み、彼女の話を『聞くだけ聞こう』という程度には耳を傾けている。

黒ウサギは気を取り直して咳払いをし、両手を広げて、

「それではいいですか、御四人様。定例分で言いますよ？ 言いますよ？ さあ言います！ ようこそ、*“箱庭の世界”*へ！ 我々は御四人様にギフトを与えられた者達だけが参加できる『ギフトゲーム』への参加資格をプレゼントさせていただこうかと召喚いたしました！」

「ギフトゲーム？」

「そうです！ 既に気付いていらつしやるでしょうが、御四人様は皆、普通の人間ではございません！ その特殊な力は様々な修羅神仏から、悪魔から、精霊から、星から与えられた恩恵でございます。『ギフトゲーム』はその*“恩恵”*を用いて競い合う為のゲーム。そしてこの箱庭の世界は強大な力を持つギフト保持者がオモシロオカシク生活できる為に造られたステージなのでございますよ！」

両手を広げて箱庭をアピールする黒ウサギ。飛鳥は質問するために挙手した。

「まず初歩的な質問からしていい？ 貴女の言う“我々”とは貴女を含めた誰かなの？」

「YES！ 異世界から呼び出されたギフト保持者は箱庭で生活するにあたって、数多とある“コミュニティ”に必ず属していただきます♪」

「嫌だね」

十六夜が茶々を入れる。

「属していただきます！ そして『ギフトゲーム』の勝者はゲームの“主催者”が提示した商品をゲットできるといってもシンプルな構造となっております」

「……“主催者”って誰？」

「様々ですね。暇を持て余した修羅神仏が人を試すための試練と称して開催されるゲームもあれば、コミュニティの力を誇示するために独自開催するグループもございます。特徴として、前者は自由参加が多いですが“主催者”が修羅神仏なだけあって凶悪かつ難解なものも多く、命の危険もあるでしょう。しかし、見返りは大きいです。“主催者”次第ですが、新たな“恩恵”を手にもすることも夢ではありません。後者は参加のためにチップを用意する必要があります。参加者が敗退すればそれらはすべて“主催者”のコミュニティに寄贈されるシステムです」

「後者は結構俗物ね……チップには何を？」

「それも様々ですね。金品・土地・名誉・人間……そしてギフトを賭けあうことも可能です。新たな才能を他人から奪えばより高度なギフトゲームに挑むことも可能でしょう。ただし、ギフトを賭けた戦いに負ければ当然——ご自身の才能も失われるのであしからず」

黒ウサギ愛嬌たつぷりの笑顔に黒い影を見せる。

挑発ともとれるその笑顔に、同じく挑発的な声音で飛鳥が問う。

「そう。なら最後にもう一つだけ質問させてもらっていいかしら？」

「どうぞどうぞ」

「ゲームそのものはどうやったら始められるの？」

「コミュニティ同士のゲームを除けば、それぞれの期日内に登録していただければOK

！ 商店街でも商店が小規模のゲームを開催しているのでよかったですら参加していつ

くださいな」

飛鳥は黒ウサギの発言に片眉をピクリとあげる。

「……………つまり『ギフトゲーム』とはこの世界の法そのもの、と考えてもいいのかしら？」

お？ と驚く黒ウサギ。

「ふふん？ 中々鋭いですね。しかしそれは八割正解の二割間違いです。我々の世界で

も強盗や窃盗は禁止ですし、金品による物々交換も存在します。ギフトを用いた犯罪な

どもつてのほか！ そんな不逞な輩は悉く処罰します——が、しかし！ 『ギフトゲーム』の本質は全く逆！ 一方の勝者だけが全てを手にするシステムです！ 店頭に置かれている商品も、店側が提示したゲームをクリアすればタダで手にすることも可能だということですな」

「そう。中々野蛮ね」

「ごもつとも。しかし『主催者』は全て自己責任でゲームを開催しております。つまり奪われるのが嫌な腰ぬけは初めからゲームに参加しなければいいだけの話でございます」

黒ウサギは一通りの説明を終えたのか、一枚の封書を取り出した。

「さて。皆さんの召喚を依頼した黒ウサギには、箱庭の世界の全ての質問に答える義務があります。が、それら全てを語るには少々お時間がかかるでしょう。新たな同士候補である皆さんをいつまでも野外に出しておくのは忍びない。ここから先は我らのコミュニケーションでお話しさせていただきますが……よろしいですか？」

「待てよ。まだ俺と彌禍が質問してないだろ」

「お、我輩もか」

「なんだねえのか？」

「まあ、あるにはあるな」

静聴していた十六夜が威圧的な声を上げて立ち、続いて彌禍も立つ。十六夜にずっと刻まれていた軽薄な笑顔が無くなっていることに気づいた黒ウサギは、構えるように聞き返した。

「……どういった質問ですか？ ルールですか？ ゲームそのものですか？」

「そんなのはどうでもいい。腹の底からどうでもいいぜ、黒ウサギ。ここでお前に向かってルールを聞いただしたところで何かが変わるわけじゃねえんだ。世界のルールを変えようとするのは革命家の仕事であって、プレイヤーの仕事じゃねえ。俺が聞きたいのは……たった一つ、手紙に書いてあったことだけだ」

十六夜は視線を黒ウサギから外し、他の三人を見まわし、巨大な天幕によって覆われた都市に向ける。

彼は何もかもを見下すような視線で一言、

「この世界は……面白いか？」

「……」

他の二人も無言で返事を待つ。

彼らを呼んだ手紙にはこう書かれていた。

『家族を、友人を、財産を、世界の全てを捨てて箱庭に來い』と。

それに見合う催し物があるのかどうかこそ、三人にとって一番重要な事だった。

「——YES。『ギフトゲーム』は人を越えた者たちだけが参加できる神魔の遊戯。箱庭の世界は外界より格段に面白いと、黒ウサギは保証いたします♪」

「では彌禍さん。ご質問はなんで、ってなんでそんな眩しいものを見ているかのように目を細めているのデスカ？」

「いや、ちよつと若者の姿が眩しくてな……」

黒ウサギが十六夜の質問に応え終わり彌禍に目を向けると、太陽を見るかのように十六夜たちを見る姿が目に入る。

「何を言っているのです。寧ろここに居る人たちの中で一番若いのは彌禍さんではないですか」

彌禍の背丈を見ながら黒ウサギは呆れる。他の問題児たちは高校生くらいで、黒ウサギに至ってはかれこれ約200年は生きている。それらを考慮すれば、成長期が終わっていないさそうな彌禍は一番この中で若いと黒ウサギは思った。思ったのだが、

「ああ、そうそう。その年齢の事んだけどね、手紙に『少年』と書いてあったでしょ？ それはやはり若い方が、まだ先もあるし力があるからなの？」

「？ まあ、そうでございませし、実際皆さん少年少女でございませししょう？」

彌禍の質問の意図がわからず首をかしげる黒ウサギ。耀も飛鳥もよくわかっていな

いようだが、ただ一人十六夜は何か気づいたようだった。

「うむう……これは困った」

「なあ彌禍」

腕を組み手に顎を乗せる彌禍に十六夜が問いかける。

「なんだい不良くん」

「もしかしてとは思うが……お前は、何歳だ？」

十六夜は己の中である程度の答えが出ているのか、半分確認するかのように見た目にそぐわない一人称と雰囲気を纏う彌禍に問う。

問われた彌禍は、忘れていた事を思い出したように目を少し見開いた。

「あ、そうだってなかったね」

一人納得しウンウンと頷くと、思い出すように首を傾げながら見た目少年の彌禍は答える。

「そうだな確か……100を超えて更にその半分を過ぎたくらいかな？」

ハ？ とそこにいた彌禍以外の全員が耳を疑った。

「もう我輩は150歳くらいだからなあ。先を期待されても困るんだけどね」

流石の十六夜も続いた言葉に、予想していたよりもずっと老いていたからか、暫く動けなかった。

それから秒針が半周するくらい時間が過ぎた後、二度目の絶叫が木霊した。

Ⅲ. 人喰いは爆弾を投下するようですよ？

「ほ、本当ですか彌禍さん!?!?」

絶叫の後、声を荒らげたのは黒ウサギだった。上半身を乗り出し彌禍に詰め寄る仕草は、黒ウサギの豊満な胸を強調させていたがそんなことには目もくれず、絶叫のせいで耳を塞いでいた彌禍は頷いた。

「正確な年齢は覚えていないけどね。1000年は絶対経っているよ」

なんでもないように、事実彼にとってはなんでもないことなのだろう、世間話でも話している風が続ける。

そんな彌禍は呆気にとられている黒ウサギを不思議そうに見つめた。

「寧ろなんで気付かなかつたんだい? ここ箱庭には多種多様な生き物があるんだよね? どのくらい相手が生きているのか分からないの?」

「そ、それは専用のギフトが必要なんです! 誰も彼もが分かる訳じゃないんですよ!」
喋るたびに首を交互に傾げる彌禍は、見た目も相まって可愛らしかった。しかしそれどころではない黒ウサギは言葉を紡ぐ。

(そんなに生きてるなんて、彌禍さんは一体何者なのです!?)

彌禍を問い詰めようとした黒ウサギが口を開くその一瞬前に、彌禍が喋り出した。

「そういうものなんだ。じゃあ我輩は施設を子供料金で利用できるかもしれない！」
だが出た言葉は些か、いやかなりズレたものだった。

納得したかのように頷き、ガッツポーズをする彌禍。その手が周りの雰囲気から浮く。が、そんなことを気にしない彌禍は意気揚々と黒ウサギを見た。

「黒兎さん。年齢で料金が変わる施設はあるの？」

「あ、あるにはありますが、そういうところはちゃんと年齢を確認するギフトがありますヨ？」

「あーやっぱりか。残念だなあ」

でもまあシニア料金でいけるからそれはそれでいいかな。

条件反射的に彌禍の質問に答えた黒ウサギ。だが頭の中はこんがらがっていた。

人であるはずの彌禍が、人の二、三倍も生きていたのだ。混乱しない方がおかしいだろう。

当の彌禍はカラカラと明るく笑い、『くろうさ』と呼んだ黒ウサギを見やる。

「さて、黒兎さん。そろそろ箱庭の中に行こうよ。質問タイムも終わりで良いだろうし、我輩は飽きてきたなあ」

彌禍は固まっている黒ウサギを尻目に、後ろを振り返る。そして黒ウサギと同じよう

に唾然としていた女性二人越しに、天幕に覆われた箱庭を見た。

「早く行きたいんだからさ、しつかりしてよ黒兎のガイドさん？」

((誰のせいだと……))

元凶が悠々としている事に、三人は何処か腑に落ちない気持ちになった。

「なあ流丸忌」

「うん？ 何だい不良くん」

黒ウサギによる説明と質問返しも終わり、釈然としない思いを抱えながらも移動し始めた一行。

その最後尾を務めるのは男二人、十六夜と彌禍である。

「どうしたの？ 我輩に何か訊きたい事でもあるの？」

他の三人とは少し距離をあけて話しているので、特段大きな声でなければ聞こえないだろう。

黒ウサギと春日部は聞こえそうだが、春日部は猫と話すのに集中していて、黒ウサギに至っては浮かれて耳が機能していない。とんだ駄ウサギである。

「そうだな、ちよつと疑問に思ったんだが」

「おお、いいよいいよ。仲を深めるには、お互いの事を知らなくちゃね」

彌禍が隣を歩く十六夜を見上げた。十六夜は前を向いたまま、言葉を継ぐ。

「お前さ、何か隠してるだろ」

「根拠は？」

素早く彌禍は十六夜に問い返す。

「質問に質問で返すのは感心しねえな」

「あはは、ごめんごめん。そうだね、その質問には『イエス』と返そうかなあ」

彌禍が目を細める。

「さあ、我輩は答えたんだから、そつちも答えてよね」

「ああ、根拠か？　んなもん、黒ウサギがお前の正体を訊こうとしただろうって時に、あまりにも急に方向転換させやがったからな。疑って当たり前だろうが」

「そつかあ。まあそうだよねえ。三文芝居だったなあつて、自分でも思ったよ。上手くその考えは、成功したようだけど」

彌禍は薄く笑いながら、前を向く。

十六夜が彌禍を見下ろす。

「んで？　何を隠してるかは言わねえのか？」

「ええ？　何で言わなきゃならないのさあ？」

クツクツ笑う彌禍に、十六夜は片眉を上げた。

「ほう？　つまりそれは、俺に当てて見せろっていう、挑戦状と受け取って良いわけだな？」

「思考が完全にバトルジャンキーじゃん。ああ、面倒くさいのに絡まれちゃったなあ」
十六夜は軽薄そうに笑って前を向く。

彌禍も特段、十六夜の言葉を気にする事なく前を見続ける。

「別に言えない訳でもない。ただ単に、然る時にしか言いたくないだけなんだけどなあ」
世界の果てを見て来ると言って、十六夜が行ってしまった森の奥に向けて、彌禍は眩
いた。